

山と博物館

第50巻 第7号 2005年7月25日

市立大町山岳博物館



もっちゃん山の楽しみ方

文・イラスト とよた 時

写真、百名山完登、高山植物、温泉など山の楽しみ方はさまざまですが、せっかく山に登って、ただ「ああ、行って来たな」ではあまりにももったいないありません。高山の短い夏の植物の営み、山の非日常的体験、かつては戦いの場であったという峠、山道にたたく石仏たち、そのほか庶民の願いがこもる山々の伝説など奥行きは深い。山の妖怪や、幻の生物なども面白く、かつて話題になったツチノコは「日本書紀」や「古事記」にも記載され、江戸中期の寺島良安の「和漢三才図会」に吉野近くの清明の滝（蜻蛉滝）でよく見かけるとあります。これを見に奈良県川上村の滝に行つて来たりしました。（観光客の見物用になっていましたが）。

とくに天狗は修験道にも関係があり、「太平記」の京都仁和寺の六本杉の評定など歴史上の変にも関わる記述をはじめ、その化身前の具体的な名を挙げる古書も多い。また修験道の祖・役ノ行者はどのくらいの山を開いたのか、と調べはじめ生まれ故郷の吉祥草寺まで行きました。ちなみに行者が開いた山は、見方により八〇座〜九〇座あまり、しかし〇〇山といつてもいゆる名刹の山号もあるため、どこまで数に入れたらいいのか迷います。そんなことからはじめたのが、わたし流の「もうひとつの山の楽しみ方」です。

山や峠、花のあんなこんなを絵はがきにして知人に送りつけたのが三七、八年前、山の通信「ひとり画展」でした。もう少しで七〇〇号になりますがまだまだ記述もこれが多い。

この絵はがきが何号まで続くかわかりませんが、空を飛ぶ術が未熟で時々溝に落ちるといふ落ちこぼれの天狗「溝越天狗」を師と仰ぎ、これからも山の楽しみ方を広げていきたいと考えています。

（日本漫画家協会、日本山岳会、山村民俗の会会員）

昭和初期の鹿島槍荒沢奥壁

—小谷部全助、森川真三郎の荒沢奥壁北稜の 冬季初登攀をめぐる—(前編)

柳澤昭夫

1、登山史と方法論

歴史は単に、事象の積み重ねで、事象を再構成したものではない。歴史は、歴史観に基づく方法論によって、事象を選択し、事象を再構成したものである。したがって、異なる歴史観と方法論によって、異なった歴史が再構成される。登山史もまた、事象を選択し、再構成したものであり、事象をどう評価するか、事象と事象の関係をどう捉えるか、そしてどう再構成するか、方法論によって当然異なってくる。それ故に、方法論に科学性が要求され、常に、方法論の科学性について検証されて、歴史は、その豊かな展開を再現することができるといえよう。

登山史は、非常に、限られた部分の歴史であると言え、研究者の間で登山史の方法論について論議が深められてきたとは言いがたく、その結果、事象の展開について事象が集積され、明確になってきたとはいえず、多くは事象の羅列であり、事象の評価、事象と事象の関係についての検証が十分になされたとはいえない。多様な角度から検討することが重要である。

近代アルピニズムはもとより、山と人との関わりが信仰に関わる「講」の登山、学術的調査研究や測量のための登山を含めて、山を生活の場としていた猟師や岩魚釣りなど、いわゆる「山人」たちの果たした役割が大きかったであろう。登山ルートを設定し、山を案内するのみならず、地理、地形、天候、雪崩等に関する経験、知識、山歩きの技術、焚き火や小屋掛けの仕方など、山での生活技術や知

恵は登山者をサポートするとともに、都会の登山者に大きな影響を与えた。当時、ヨーロッパ登山の経験者や文献を通して入ってきた登山技術や装備とこうした「山人」の経験と知恵が、ヨーロッパのアルピニズムの登山の展開を支えたと考えられる。

本稿は、山と人の関わりを、登山として総合的に考察したものではない。部分的ではあるが、登山をスポーツ的観点、つまり、大正時代から意識的に展開された、未知な山域での、より困難なクライミングをより困難な季節に展開を試みたアルピニズム的思考の昭和初期、鹿島槍北壁、荒沢奥壁の冬季初登攀について検証するものである。

もちろん、当時の登山が、全てアルピニズム的登山であったわけではない。信仰に関わりの深い「講」の登山は行われていたし、学術的登山や探検的登山も行われていた。アルピニズムとツーリズムの世界がちんと分離される、氷河を持ち、急峻な地形のヨーロッパアルプスと異なり、日本アルプスは特殊な登山技術を身につけることなしに夏山は登ることができるところである。日本では、まさに、日本的な多様な登山が展開された。こうした登山を可能にしたのは、「山人」の活動はもとより、登山基地となる山麓の旅館の営業、山小屋の建設や登山道の整備、地形図、ガイドブックの市販など多様な要素があった。

明治政府の富国強兵政策や大正デモクラシー、やがて戦争へと向かう植民地政策など社会的影響も否定できない。アルピニズムは、社会、歴史の流れから切り離されて存在しな



鹿島槍ヶ岳北壁

追求したのではない。とは言え、アルピニズムは、こうした「山人」なしには展開できなかっただろう。本稿は当時の登山を幅広く解析しようとしたのではない。一部のアルピニズム的な登山の展開について言及し、そうした登山がなぜ可能であったかを考察するものである。

2、鹿島槍荒沢奥壁冬の初登攀

アンデレル・ヘックマイヤーやハインリッヒ・ハラールらによってアイガー北壁が初登攀されたのは、一九三八年七月であった。同じ年の七月、グランドジョラスのウオーカー・バットレスもリカルド・カシンらによって初登攀された。

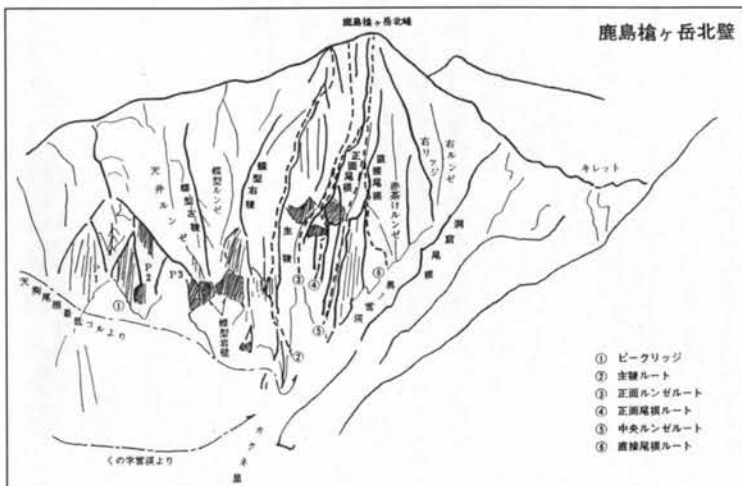
い。それ故に、歴史の流れを考慮しなければならぬのももちろんである。

当時のアルピニズムの担い手の中心は大学山岳部であり、スポーツ的登山が可能であったのも、ごく一部の限られた階層でもあっただろう。そうした人々は、日本山岳会を構成している。つまり、大学山岳部と日本山岳会を中心にアルピニズム的課題が追及された。

当時の登山事情から見れば、そうした人たちと地元(大町、穂高、白馬など)の「山人」と呼ばれる、猟師や岩魚釣りを生業としていた人たちとの関わりも重要である。ただし「山人」と呼ばれる人々は、アルピニズム的登山をした人々を支えたとはいえず、彼らは、生活のために山を案内し、人夫として働いたのである。

「山人」の案内、経験、勘、山での生活の知恵は、ことに、冬季登山にとってはなくてはならないものであったかもしれない。

しかし、「山人」は、あくまで山へ仕事をしに行くのであり、アルピニズムを



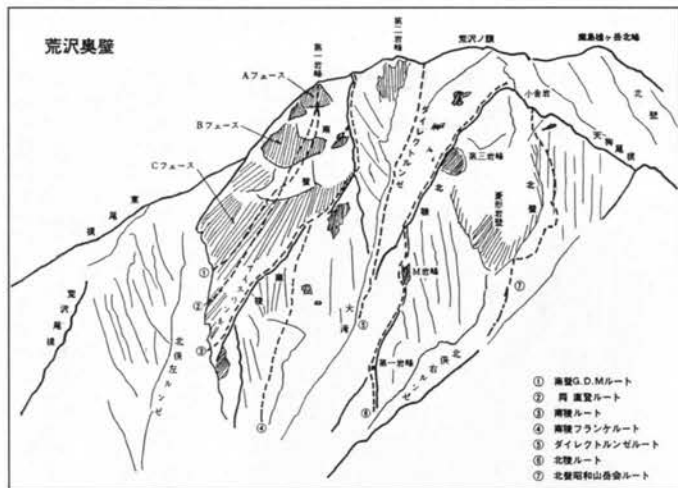
北壁ルート図 白社『日本登山大系 (グループ・ド・モレーヌ)』より



鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁(2月)

驚くべきことに、その三年前の一九三五年三月、旧制浪速高校山岳部の今西寿雄(後の日本山岳会長)らによって鹿島槍北壁が、翌三六年一月に同北壁主稜が、早大の小西宗明らによって、さらに、三七年三月には不世出のクライマー東京商大の小谷部全助と森川真三郎によって、荒沢奥壁北稜が、それぞれ冬季初登攀された。こうした鹿島槍の北壁、荒沢奥壁の初登攀が、あの有名なアルプス三大北壁の二つ、アイガーやグランドジョラスの夏の初登攀より前であったことは特筆に値しないだろうか。確かにヨーロッパアルプスの岩壁のスケールは大きい。しかし、アイガーやグランドジョラスの登攀は夏で、冬季のそれは戦後のことである。一方、鹿島槍での初登攀は、すさまじい冬の季節風が吹き荒れ、寒気、吹雪、豪雪、雪底、きのこ雪など極めて厳しい条件下での登山である。スケールの違いを割引いても、この北壁と

奥壁の冬の登攀は、ヨーロッパアルプスのバリエーション登攀に勝るとも劣らない、世界に誇れる記録だと思ふ。
日本でアルピニズムを本格的に追求する登山が、鹿島槍を舞台に展開された。黒部川沿いに吹き上げてくる冬の季節風は多量の降雪もたらし、荒沢は、雪崩が頻発する恐ろしい沢になる。岩峰や岩稜には、雪底やきのこ雪が覆い被さり、岩壁には氷が張り付き、手懸りや足場は雪と氷で覆われ、一つ一つ掘り起こしながらの困難な登攀になる。
小谷部らは、白馬村神城から入山し、今の五竜遠見スキー場、地蔵の頭付近に基地を設けた。大遠見に第二キャンプを設け、前進基地とする。そこから白岳沢とカクネ里の出会いへ下り、カクネ里をつめ、おそらく、「く」の字雪渓辺りを天狗尾根に登り、天狗の鼻に第三アタックキャンプを設けた。天狗尾根から荒沢北侯の右俣を下降して、奥壁北稜に取



荒沢奥壁ルート図 白水社『日本登山大系』より



鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁の冬

り付いている。
天狗尾根のアタックキャンプを出発したのは、早朝五時。北稜に取り付いてからM(第二)岩峰まで八時間かかった。M岩峰の登攀は、極めて難しく、時間がかかった。途中休憩をはさみ、北稜に登り終え小屋岩については、二三時。四時間ほど休憩し、天狗尾根を下り、アタックキャンプに着いたのは、翌日の十一時三〇分であった。実に三〇時間半に及ぶ壮絶な初登攀だった。
因みに、荒沢奥壁北稜の積雪期第二登は十八年後の一九五五年四月である。第二次世界大戦をはさんでいるとはいえ、これだけ第二登までに時間のかかったルートも少ない。いかに困難な登攀な初登攀だったかを物語っている。もちろん、今日でも困難なルートである。
冬の登攀は、時としてマイナス三〇℃を超える寒気、風雪、雪崩、人の力ではどうすることも出来ない厳しい荒天に翻弄される。生きぬくことに全力を傾けても力尽きるかもしれ

ない不安に怯える。考えうる限りの合理的危険を排除しても、言い知れぬ恐怖が付きまとう。荒れ狂う冬の山では、人はあまりにも小さく、弱い存在にすぎない。
今から七〇年前のクライマーたちは、貧弱な装備と情報、そして全くベシシクな技術で、クライミング上の問題よりもっと大きな不安や恐怖と闘い抜いたに違いない。それは未知なる領域に挑戦する者に共通する困難と恐怖だろう。
3、昭和初期の登山技術
①ロープワークと確保技術
当時の技術書から見ると、確保技術は、アンカーの重要性が細かく指摘されて、ビレイヤーの確保体制、墜落の衝撃の大きさ、その方向を予測して構えることが書かれている。ハーケン、アイスハーケンでランナー(途中の支点)が取られ、プロテクション(確保における防御のシステム)がきちんと構成されている。ロープ操作についての詳細から見ると、器具による確保はなく、肩がらみ確保であるが、ロープによる確保は、現代の技術と全く変わりにない。もちろん、当時の装備、ハーケン、カラビナ、ロープ等の破断強度は、今の装備の半分に満たないだろう。ことに、ナイロンロープが出現していない時代、マニラ麻ロープの張力係数(衝撃がかかる時ロープが伸びて衝撃を吸収する係数で、係数が小さいほど良く伸びる。今のナイロンロープは、およそ一〇〇〇から一二〇〇)はおよそ二〇〇であり、ロープの伸びによる、衝撃の吸収力は、非常に低かった。手袋を使用していないところから、制動確保による衝撃を緩和する確保理論は、まだ無かったと思われる。そうであったが故に、落下係数をおさえ、衝撃を小さくするため、プロテクションの構成やロープのたるみによる墜落距離が大きくなることに繊細な注意を払っている。驚くことにダブルロープが使われている。ロープの強



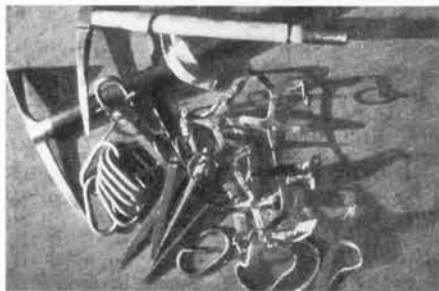
当時の装備②※
登山靴、クレッターシューズ



当時の装備①※
ハーケン、ハンマー、カラビナ、ロープ

度を補うとともに、吊り上げなどの初歩的な人工登攀技術が使われていたかも知れない。おそらく、トッポの墜落を確保することは奇跡に近かったであろう。現実には、トッポは墜落してはならないという想定の上に確保技術は構成されていたのではないだろうか。と仮定すると、トッポのルート構成力、プロテクションの構成力、クライミングにおける読み、セルフコントロールなど理論的な能力とともに訓練と実戦の経験の集積によって非常に高度な技術をトッポは身に付けていたと考えられる。

②ピッケル、シュタイクアイゼンの技術
当時、ピッケルの形状から見ると、主として、ホルドのカッティング（手懸り、足場を作



当時の装備③※ 昭和初期の登攀用具

めて可能にした。ヤングやウエックスラーの確保理論を現実に可能にしたのである。もちろん、ナイロンロープの出現だけでなく、ハーケン、カラビナなどプロテクションを構成する用具が多用されるようになるのは、一九六〇年代に入ってからであり、ナイロンロープの出現が直ちに、確保技術の質的变化をもたらしたわけではない。しかし、条件付きとはいえ、確保が完成されて、極限的クライミングが可能になったことからすると、当時の世界的レベルの登山の展開を可能にした登攀を支えた要因は、すでに確保技術が成立していたからであると考えられる。当時の確保用具や技術から考えると、クライミング中、細かく支点を取ることが難しい場合など、プロテクション構成が不全なことも多かったと思われる。そうした場合、トッポは絶対墜落してはならないのである。クライミングにおけるルートの読み、テクニク、セルフコントロールに非常にレベルの高い判断力と技術を身につけていたに違いない。こうした力をどのようにして習得したのだろうか。文献ことに外国文献その他から多くの知識を習得したことは確かであるが、アプローチそのものが未知の領域であり、実戦的訓練に当たると考えると納得がいく。



当時の装備④※ シュタイクアイゼン

る)に使われた。現代のように硬い氷にピッケを打ち込んでアンカーにし、アイゼンのフロントポイントを足場にすることはできなかった。氷壁のところは、一つ一つ手懸りや足場をカッティングしなければならぬので非常に困難で時間がかかった。また、フロントポイント、つまり、つま先の四本の爪で足場を作ることができないので、多くの場合つま先の二本または一本の爪(ツアック)で小さな足場に立っていた。高度なバランスと訓練が必要な技術である。

驚いたことに、ヘックマイヤーは、アイガー北壁の初登攀に、特別にフロントポイントアイゼンを考案し、第一雪田をかけ上がったとき、ハラーは述べている。このスピードで一日遅れて取り付いたにもかかわらず簡単にハラーらに追いついている。

今も変わらないが、荒沢奥壁には、巨大なきのこ雪ができる。このきのこ雪が登攀を著しく困難にする。頭の上に覆いかぶさるきのこ雪をピッケルで切り落とさなければならぬので、恐ろしく時間がかかる。取り付いてからM岩峰まで八時間かかっているのは、きのこ雪と格闘したためであろう。

使われたかどうかかわからないがアイスハーケンやアイスバイルもすでに存在している。

山と博物館 第50巻 第7号
発行 二〇〇五年七月二十五日発行
〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―1
市立大町山岳博物館
TEL 026-226-1130
FAX 026-226-1131
E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 奥村印刷
定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇七―一三三九三

困難なクライミングの展開は、クライマーの優れた資質やテクニクにあったことも事実であろう。しかし、いつの時代も、登山を推し進めてきたのは積極的な攻撃力より、むしろ、ディフェンスの力の向上である。安全が合理的に構成されて、初めて、困難なクライミングに挑戦的になれるからである。少なくとも、防御の力は、合理的に構成することが可能であり、それがベースになって登山は発展してきたと考えるからである。もちろん攻撃の力も、合理的に構成されて、大きな力となることは言うまでもない。つまり、安全性の向上が登山の健全な発展を支え、より困難な課題を解決してきた。(10月号へつづく)
(市立大町山岳博物館館長)



当時の技術※

※印の写真…朋文堂『登山技術(海野治良、西岡一雄)』より

おそらく、ロックハーケンとともに使用されたとと思われる。